



たね通信

6月

No. 17 2014年
発行 地域生活ケアセンター
小さなたね
【医療法人にのさかクリニック】

先月、たねで行われているパン教室に参加しました。人生初の試みにドキドキでしたが、先生の分かりやすい説明と、2種類のパン&おやつを作るということで、ウキウキに変わりました。

材料を混ぜ、生地をこねていくと……何とも気持ちいい♡ やみつきになりました!! 次回からは毎月参加することを心に決めました。

たねナースのつぶやき

家族も本格的な出来にビックリ! 今日は羽太家の女子全員参加となりました。(笑)

ちなみに、次回は6月24日です。

皆さんもぜひひびご参加を! ウキウキ間違いなしです!! (羽太)



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス (グラスアート TAKAMI 製作・寄贈)



想像の翼を広げて!

小さなたねでは、毎月第3水曜日に勉強会を開いています。最近では、乳幼児の発達や心理の学びとして、テキストによる読書会を行っています。前回は「わずか生後1か月前後で、赤ん坊は母親が対応してくれなければ泣き声を強め、抱き上げると泣き声のトーンを変える……親子の関係は初めてから生得的に成り立っているのではなく、こうしてお互い築き上げてきた結果」によるものでした、親子や大人と子どもの関係を遊び直しました。

小さな子どもを抱いた親子の関係性を考えると、抱かれている子どもは受け身の存在として位置づけてしまいがちです。ところが、その双方による能動・受動の働きかけを繰り返しながら人間関係を深め成長していくとするなら、子どもを小さく弱い存在として位

置づけ、大人の都合や考えを優位にしていては、健全な関係性を築いているとは言えません。「大人→子ども」、あるいは「与える側→与えられる側」といった一方通行のベクトルではなく、双方が与えながら受けるベクトルの方向を感じながら、互いを尊重しあえる関係をつくっていきたいもの

子どもは「小人」ではない

所長 水野 英尚



医療法人にのさかクリニック
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林6-23-3
電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052
E-mail : chisanatane@tune.ocn.jp
ブログ : <http://chisanatanetane.blog.ocn.ne.jp/blog/>

後記

雨には苦い思い出がある。重症心身障がい児の息子が8歳、娘が4歳の頃、外出中に突然ポツポツと降り始めた。自宅までは徒歩で20分程。たまたまバス停が近く、見ればちょうどバスが来る。安心してすぐ、車内に立つ何人もの乗客が見えた。足を止めた私を見上げる娘に「ごめん、バギーが乗れない」。そこへ娘と同い歳くらいの子と母親が走ってきて「よかった~」と乗り込んでいった。そのあと何も言わずに走る娘と、静かに濡れるばかりの息子。私は申し訳なさでいっぱいだった。(E)

ホスピタリティの源流

「お・も・て・な・し」で沸いた東京オリンピック誘致熱も冷め、最近はすっかりメティアから流れなくなってしまった。現代は田まぐるしげほどの情報量が日々の暮らしに流れ込み、それに振り回されて生活していることが多いように感じます。今回は一度立ち止まり、改めて「おもてなし」について考えてみたいと思います。語源とされるラテン語「ホスピティウム」（よそ者を客として迎え入れる）に起因する「ホスピタリティ」。病院「ホスピタル」や宿泊施設の「ホテル」、あるいは繁華街での「ホステス」や「ホスト」といった方々も、「ホスピタリティ」から派生した施設や職業だと言えます。その歴史は古く、中世の時代「見ず知らずの旅人を客として迎えた」その行為にまで遡ります。

そのように考えますと、現代の「おもてなし」の形態は、かなり様相が変わったものとして発展していると思います。もてなす対象の如何によって、その場所や意味が大きく異なってくるのです。

当時のもてなしの対象は、家族や仲間から見放されて

しまった人、あるいは言われの無い偏見や差別で苦しむ人、また、貧しさの中で日々の生活に喘ぐ人たちが含まれていたと思われます。さらに、アウトローと呼ばれる無法者への情けが裏切りとなり、自分の命を失う

という危険をもったのではないでしょうか。

しかし、現代のホスピタリティは、立派な建物に充実した設備を完備する」とが競われ、マニュアルで操作された「おもてなし」を享受する場所になつているように見えます。またしかし、それも「ある人」たちが「安心」して暮らしていくための、必要な場所だとも言えます。私が「」で考えたいことは、そういう場所を批判する「」だけでなく、いかに「現代のよそ者」が、本来のもてなしを受けることができるようになっているかということがあります。孤立・無縁とされた個人と社会との有意義な繋がりを恢復させ、生活していく仕組みを創り出す」とい



本の紹介

『ホスピスが美術館になる日 ケアの時代とアートの未来』

「健常者、障害者を問わず、なんとか今を生き延びようとする人たち」とって、ケアはなくてはならないものの『制作』（アート）なのである」
（本文より）

医療や福祉の「専門職」が偏りがちな課題を、「アート」という切り口から語る著者の視点は、とても新鮮です。

ホスピスが
美術館に
なる日
ケアの時代とアートの未来

横川善正

ミネルヴァ書房

横川善正 著

（ミネルヴァ書房、定本体2200円+税）

『花さき山』



斎藤隆介 作・滝平次郎 絵

（岩崎書店、本体1200円+税）

「やあこいつ」とをすれば 花がさく。
いのちをかけてすれば 山が うまれる。

うそではない、ほんとうの「」だと……

（本文より）

私たちの目に映るその景色が、そうであるならば、多くの犠牲の上に「今」があるのだ。

計画相談支援について

平成27年度から、障がい福祉サービスを利用する全ての人には「計画相談支援」(サービス等利用計画の作成)が実施されることになっています。

この「計画相談支援」とは、

- ①「指定特定相談支援事業所」との契約をして、「相談支援専門員」が各家庭を訪問して、生活状況やサービス利用の希望内容を確認し、各種のサービス内容やスケジュールをまとめ、「サービス等利用計画」が作成されます。
- ②「相談支援専門員」は、障がい児者の保健・医療・福祉分野における相談支援業務を行ったため、5年間の介護などの実務経験があり、都道府県が実施する研修を受講終了した人です。利用計画を立て、サービス事業所を交えての担当者会議や連絡調整を行いながら、定期的にアウトリーチ支援としての家庭訪問をします。

が行つてきいたサービス調整やスケジュール管理を、マネジメントすることが「計画相談支援」というものですが、この「計画相談支援」とは、住み慣れた地域で生活を続けていためには、どのような支援が必要であるのかを考えていく機関として、福岡市より指定を受けた場所です。そのためには、どのような支援が必要であるのかを考えていく機関として、福岡市より指定を受けた場所です。

ケジユール管理を、マネジメントする人が「計画相談支援」というものですが、制度として実現しようとしています。

ところが、制度は作られその施行日も決まっているのですが、実際の事業所と専門員が不足している現状です。支援従事者たちはマネジメントする力が求められ、その働きが期待されています。

このような障がい福祉サービスにおけるケアマネジメントの必要性は、以前から望まれていました。ようやくそれが、制度として実現しようとしています。



そが、ホスピタリティの真骨頂であると考えます。

小さなねを利用している重い障がいのある人たちは、多くの場合、家族に愛されて、手厚い医療や福祉のサービスを受け日々暮らしています。一見すると「孤立・無縁」とは程遠い存在に見えます。しかし万が一、母親が病気で倒れてしまったら、その状況は一変します。当然、主な介護者が不在になりますから、自宅で暮らすことさえ困難になります。そこで、仕方なく入所ができる施設を探しますが、重い障がいのある人を、すぐに受け入れてくれる施設はありません。そこで、地域エリア（県外）を広げて探すといふことになります。

遠方に受け入れてもうえる施設があつたとしても、それは、これまで築いてきた関係性の全く届かない場所で暮らすことになります。

一人ひとり、生活の場は違うけど



な関係性がつくられるとはいって、当事者たちにとって、

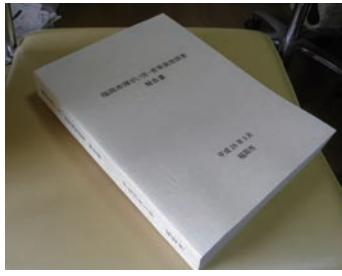
それはまさに「孤立・無縁」の状況だと呼べるのではないかでしょうか。

障がいの重い人たちの現状は、常にそういう状況になるかもしれないということと隣り合わせです。「ホスピタリティ」のテーマは、重い障がいのある人たちの地域生活のサポートを目指す、小さなねの中心テーマということがあります。

今このでの働きは本当に小さく、わずかなもてなししか出来ていませんが、それでも、目の前の支援を必要とする人たちと共に歩み続けたいと願っています。無力を日々痛感させられます、きっとそこに必要な助け手が与えられる」とも信じています。この地域に「小さなね」があつて良かった、安心してこの街に暮らし続けていける、そう思ってもらえたために、一人ひとりと共に成長させてもらいたいと思います。

「一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長する」と、自己実現する」とを助ける」とあります。

（ミルトン・メイヤロフ著、田中真・向野宣之訳
『ケアの本質——生きる」との意味』（ゆみる出版））



福岡市的人口146万7221人の希薄化の問題が表れているといふことでしょう。

福岡市より右記の報告書（平成26年3月）が郵送されてきました。4センチ程の、かなり厚みがあるものです。

この調査の目的は、福岡市在住の障がいのある方たちの生活実態や福祉政策に対する要望を把握するためのものです。

福岡市障がい児・者等実態調査報告書

先日、福岡市より右記の報告書（平成26年3月）が郵送されてきました。4センチ程の、かなり厚みがあるものです。

人に対して、身体・知的障がいの手帳保有者は6万863人で、市民の約24人に1人が身体または知的の障がいがあるという状況です。

今回の調査を受けて、西南学院

会福祉学科）は、「調査から見えてきたことは、障がい児・者の人間関係が狭く太いことである。し

たがって、うまくいっている時はさほど問題にならなかつたことが、ある問題が生じた途端一気に崩れしていくという危うさを抱えていると指摘しています。やはり背

景には、都市部における人間関係

の希薄化の問題が表れているといふことでしょう。

* 問合せ先：福岡市保健福祉局障がい者部
障がい者在宅支援課

いいます。
この調査報告書が、豊かな暮らしを創るステップになることを願っています。



昨年9月に開催しました「たねふえす」を、今回は6月にすることになりました。

寄せ植え体験(要予約)、名物うどん、かしわご飯、フリーマーケット、そして今回は「碧園」さんのご協力により、野菜・おこわ・わたがしなどの出店もあります。

みなさま、お誘い合わせの上、ぜひお越しください!!

☆ お願い ☆

今回のバザーの売上金は、小さなたね玄関前に雨除けのための「カーポート」設置資金の一部に充てたいと考えています。ご協力のほど、よろしくお願いします。

